

第14章 事故後の救助要請

道迷い後の事例の中に、元気で彷徨った人が疲労凍死して、怪我のため一ヶ所にとどまって救助を待った人が助かった、という話がある。「自力脱出は無理」と判断したら、ためらわず救助要請に方針を切り替えること。中高年者が人を背負うのは無理だから、動けない人がでたら救助を要請するしかない。パーティーが事故からピンチを経由して“遭難”という事態になってしまった時は諦めて、統制がとれて節度ある立派な遭難をしよう。遭難に立派も何もあるものかと人は言うかも知れないが、済んでしまった事は仕方ないのだから、救助隊から“ひんしゅく”をかう事のないような、礼儀正しい遭難を心掛けること。その為には上手に救助を依頼し、救助隊が到着するまでどのようにして待つかのノウハウを身に付けておきたい。この時、大人数のパーティーで一番困るのは鳥合の衆で、中途半端に知っている者ばかり集まって、あーだこーだとワイワイ言っていたら何も結論が出ない。たとえ最良の方法でなくても、誰か一人が仕切った方がはるかに早いし、スムーズに行く。反対に何も知恵が浮かばないのも困る。冷え切ったアルプスで同行者全員が ボーツとしてヘリコプターの到着を待っていたという事例があり、怪我人は薄いシートに寝かされただけで唇を紫色にして震えていたというから、これでは救助隊が来る前に低体温症になってしまう。

実際の遭難場面では気持が動転しているから、ここで書く資料のようにきれいに出来るはずはないが、普段から予行演習しておくことで、いざという時パニックにならず、冷静に対応出来るはずだ。

1、遭難

「パーティー以外の第三者が動き出した状態」というのが遭難の定義だ。家族の要請で救助隊が出動し、翌朝自力下山した遭難者が“自分達はビバークしただけで遭難していない”とテレビで主張していたが、この定義に当てはめると明らかに遭難だ。ビバークは正しい判断だったけれど、それを遭難騒ぎにしない為の配慮が欠けていたと思う。

事故が発生しても遭難に至らないケースはたくさんある。自力脱出が可能な時は出来るだけ頑張ろう。技術や知識を身に付けて登山力をアップさせればかなり解決するのだが、それには時間がかかる。気持の切替えだけで、今すぐ遭難を減らせる方法はないだろうか。その答は次の“登山の鉄則”を守ることだ。

登山の鉄則①道に迷ったら登る

道に迷ったからといって沢へ下ってはいけない。初心者は沢を辿っていけば街に出られると思いがちだが、沢ほど怖いものはない。沢は“沢登り”という特殊な登山分野で、しかも下りは登りより難しい。技術の無い者が装備もなくて出来るものではない。涸れた滝をなんとかかズリ落ちながら下った先に到底降りられない滝が出てきたとする。先程降りた滝は技術が無いから登り返せないし、左右は岸壁。沢筋は携帯が繋がらない。捜索ヘリコプターが出動しても沢の中は死角となる。一方、日本の山では頂上稜線にたいてい登山道か仕事道がついているから、高みへ登っていけばどこかで道に出られる。

登山の鉄則②道に迷ったと気付いたら気持を落ち着かせる

道迷いからパニックになった事例はたくさんある。事故でピンチに陥った時パニックになると痴呆的症状が生まれる。孤独感や恐怖心から夢遊病者のように山中を彷徨い、衣服を脱ぎ、靴も脱ぎ捨て、力尽きて倒れる。別の事例は7月の暑い時期の低山にもかわらず両足凍傷というから調べたら、足を沢に浸したまま一夜を明かしたらしい。落ち付いて開き直って、暗くなりそうなら早めにビバーク体勢に入れば良い。朝になれば何かしら解決策が生まれる筈だ。

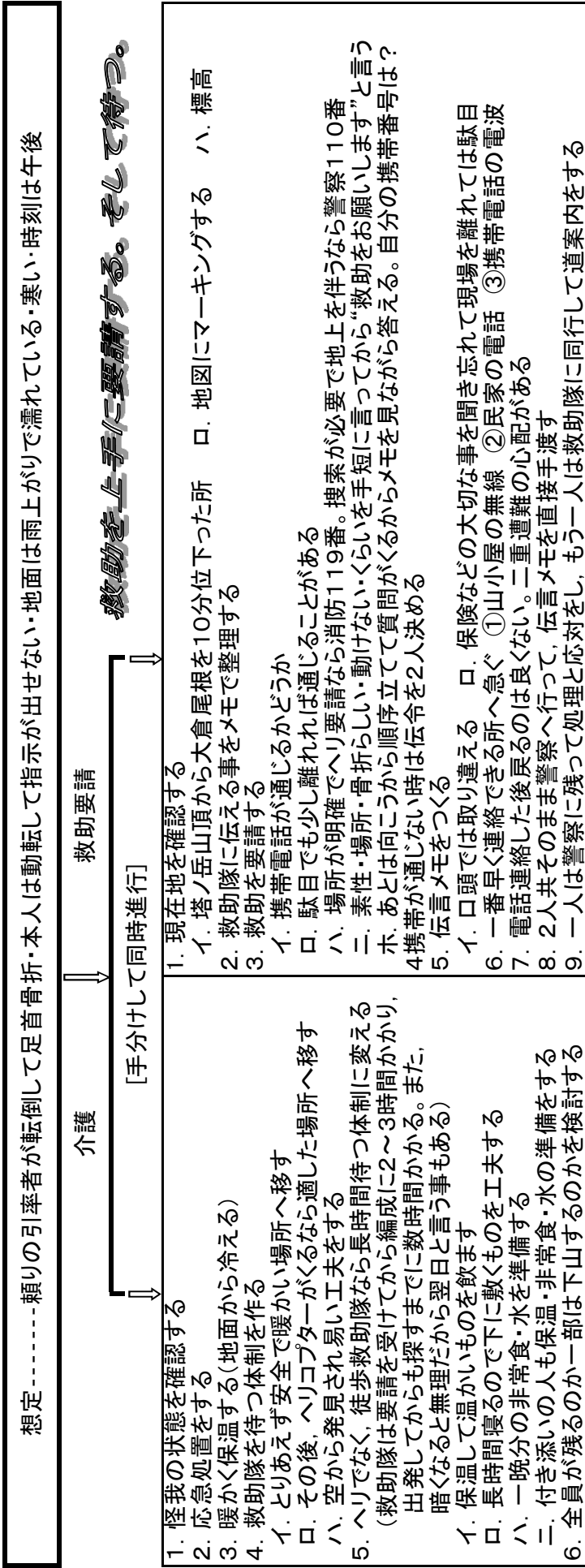
登山の鉄則③登山に出発する時は常に夜間歩行とビバークの覚悟をしておく

経験しておくことと装備を携行することは勿論大切だが、家族の理解を得ておくことはもっと重要だ。自分にはこういう知恵があって、こういう装備を持っていくんだと全てを話し、何も連絡が無かったらきちんと対応している証拠だから、“予定日に帰宅しなくても翌日一杯は騒がないで欲しい”と言って安心させておこう。

2、救助要請マニュアル

怪我での遭難を想定して救助要請のプロセスを整理した。これに沿って近くの山で練習しておくが良い。

救助要請 マニュアル



救助を上手に要請する。ぞして待つ。

3、緊急連絡シート

連絡シートの見本は世の中にたくさんあるが、あらゆる場面を網羅しようとして詳細に過ぎる。使う人を一般登山の入門者に絞って必要最低限の緊急連絡シートを作成したので、次の場面で活用して欲しい。①救助隊への連絡②伝令の伝言メモ

緊急連絡シート

作成日時

遭 難 者							
	フリガナ						
	氏名		年齢		性別		血液型
	現住所 〒						
	電話番号				携帯番号		
	緊急連絡先(続柄/氏名/住所)						
	緊急連絡先連絡方法(電話等)						
	所属山岳会						
	山岳保険の加入	有/無	保険の名称/番号				
	登山届けの提出	有/無	登山届け提出先				
グループの非常装備/食糧/水							
事 故 の 内 容							
	いつ				パーティーの人数		
	どこで						
	どのように						
	遭難者の状況						
	歩けるか				意識は		
	遭難者の特徴・ウエアなど						
	応急処置						
救助隊の要請	有/無				ヘリコプターの要請	有/無	
通 報 者							
	フリガナ						
	氏名						
	現住所 〒						
	電話番号				携帯番号		
遭難者との関係							

* 山行時にはいつも2枚持っていく。(一枚は伝令者が持って下り、一枚は現地の控)

* 氏名・保険など分かる所はあらかじめ書いておく。(遭難時には書けないかも知れない)

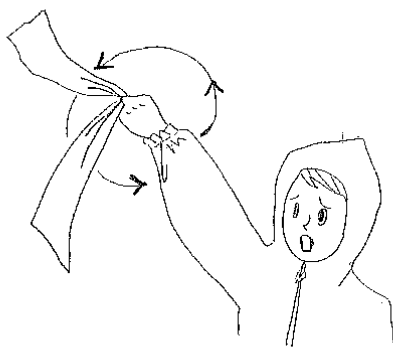
4、ヘリコプターについて。

ヘリポートには条件がたくさんある。30m×20mのスペースが必要、周囲 100m以内に10mを越える樹木があってはならない、等々だが山にはそんな条件の良い場所はない。普通はホバーリング(空中停止)してホイストで吊り上げる方法をとっている。

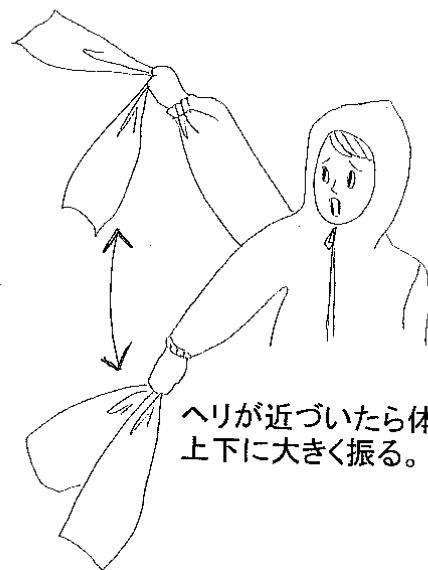
人の側からヘリコプターの姿は良く見えるが、上空のヘリコプターからは山中の人などかすかな点にしか見えない。木の枝をかなり落して手を振っても発見して貰うのは難しいから、いろんな工夫をしよう。煙を立ち昇らせるのが一番良いのだが、いつでも出来る事ではない。揺れ動く物は発見され易いので、レスキューシートを揺らせば乱反射も加わってとても目立つ。色の中では白色が山には無い色だから紛れない。鏡の反射やカメラのフラッシュで発見して貰った人もいる。今後、普及が進んでGPSがもっと身近になれば、ヘリコプターはGPSを積んでいるから強力な通報手段になるだろう。

ヘリコプターが近寄ってきても大勢で手を振らないようにしましょう。ご挨拶で手を振る一般ハイカーが多いので、それと間違えられてしまう。岐阜・長野・富山、三県山岳遭難対策連絡会議はヘリコプターに救助を求める合図を次図のように制定した。

ヘリコプターに救助を求める合図



ヤッケ等を片手に持ち、大きく円を描く。



ヘリが近づいたら体側で上下に大きく振る。

5、山岳保険

民間ヘリコプターが1回飛ぶと100万円以上かかる。1分間1万円で、一旦調査にきて旋回して戻り、人や装備を積んで再飛来するのでそういう金額になる。一方、地上捜索も人件費×日数なので大変なお金がかかる。警察や消防は5日前後のうちに手掛かりが無ければ組織的対応を打切るので、その後は民間が頼りだ。しかし、山岳保険に必ず入りなさいとアドバイスするのは費用負担の理由ではない。いざという時、ヘリコプター

がすぐ来てくれるかどうかであって、緊急時だからお金の問題ではない。ヘリコプターを要請すると本人が保険に入っているか聞かれて、入っていないと費用支払いの話になり、調査して支払いが確実でなければ飛ばない。警察のヘリコプターは無料だが空いていることが少ないから期待しない方がよい。民間ヘリか警察ヘリかの判断は警察がするのであって、登山者から“民間にしないで”とは言えない。入院や死亡については街での保険に入っているだろうから、山岳保険で検討する要素ではない。大切なのは遭難捜索費用保険と救援者費用保険で、それぞれ保険金200万円以上を目安にしよう。遭難捜索費用保険は岩登り・雪山・バリエーション登山の為のもので、ザイル・ピッケル等の用具を必要とする登山を対象にしている、救援者費用保険は一般登山やハイキング用で無雪期の普通の赤線ルート登山を対象にしている。両方の登山をする人は2つ共入らなければならないが、最近は2つを合体したオールランド保険が出回るようになった。

6、救助隊に感謝の念をもとう。

①ヘリコプターは命懸けで飛んでいる

暖房を入れるとエンジンのパワーがダウンする上にフロントガラスが結露で曇るから、冬でも暖房を切って髭からツララを垂らして操縦している。

岩陵地帯・岩壁の中・谷筋・急斜面でも必死の思いで飛んできてくれる。有視界飛行のヘリコプターにとって視界を奪われる事は命取りの筈だが、多少ならガスっていても来てくれる。

②民間のヘリコプターは山岳救助に慣れている

警察・自衛隊・民間とあるが気持の上でも技術の上でも民間は山岳救助に慣れていて、お金をとるだけのことはある。警察のヘリは只だから、民間のヘリに来て貰いたく無いと思っている人は考え直そう。遭難した時大切なのはお金でなく、上手に助けて貰う事ではないだろうか。料金を廻っていやな話を聞くが、助けて頂いたのだから気持よく支払おうではないか。

③救助隊への礼儀

救助隊の人達は他に自分本来の仕事を持っているのだから、その日の予定をキャンセルして助けに来てくれているのだ。救助隊には礼儀正しく接し、感謝の気持を態度で表わそう。

④事前に登山計画書を出す

行方不明者の捜索で登山計画書が出ていないと、救助隊に多大な迷惑をかける。登山口か登山最寄り駅のポストに入れるのが普通だが、個人情報悪用されたくないと思うなら県警へ送っても良い。ホームページでも受け付けてくれる。